

# 母校の学恩に謝す<sup>(※1)</sup>

中第二十八回卒 鎌田 正<sup>(※2)</sup>

一、石川先生の薫化と失言

私は相馬高等学校の前身、相馬中学校を昭和五年（一九三〇）に卒業し、爾来七十八年を経過しており、往時を回顧すれば茫茫として記憶も定かでないが、私の生涯に大きな薫化を及ぼしたものは、母校相中時代における石川虎之助<sup>(※3)</sup>先生の漢文の授業である。

辺幅を飾らず、一字一句に情熱をこめた朗読と、諄々として教えられた詳しい解説は、若き我々を心より感動させてやまぬものがあつた。知らず識らずの中に、漢文に心惹かれ、名句・名文などを暗唱して楽しんだものである。

ところが、この石川先生に思い出に残る重大な失言がある。第四学年のころと思われるが、漢文の授業の折、孟子の「三楽」を説明された石川先生は、

父母俱存、兄弟無故、一樂也。仰不愧於天、俯不作於人、二樂也。

と声高らかに説明され、「第三の楽しみを知っている者には漢文の試験を免除し、百点を与える。」と約束された。級友誰一人として答える者は無かつたが、私はそれを暗記していたので、

得天下英才而教之、三樂也。

と答えると、石川先生なんと頭を抱えて、「前言これに戯れしのみ。悪かつた。前言は取り消す。」と言われ、呵々大笑された。忘れられない思い出である。

二、孟子の名言

『孟子』は、後日、石川先生より講義を拝聴することが多かったが、感激して鼓舞激励せしめられたものは、告子編下に見える、

天將降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身、行拂亂其所為、所以動心忍性、曾益其所不能。

という名言である。わが身にふりかかる逆境難難を天の与える試練と覚悟し、耐え難きを忍び、心身を鍛錬すれば、大任・大事業を成就することができるという至聖孟子の大教訓である。

回顧すれば、恩師諸橋博士の大事業であつた『大漢和辞典』編纂の委嘱を受け、級友米山寅太郎君と協力して、その事業に参加したのは、昭和十四年正月からで、爾来、四次に亘る事業に専念して大任を果たすまで六十年の星霜を経過したが、その間、生命の危機に襲われることが一再でなかつた。

忘れもしない、昭和十九年七月二十四日早暁、洛陽郊外における激戦に、不運にも敵弾に倒れ、出血多量にて生存見込みなしという軍医の宣告を受けたが、輸血によつて九死に一生を得、河南省許昌の兵站病院にて治療中、栄養失調に加えて胸膜炎を併発し、歩行も自由ならず、重症に呻吟した。軍医も回復見込みなしと診断して、重症病棟に移された。

この際である、内地に打電した公電が、「戦傷ス」を「戦傷死ス」と誤伝され、東京の留守宅に設けられた仮り祭壇の前で、恩師諸橋博士が慟哭されたということが荊妻からの音信で知ることができた。

その昔、顔回の霊前で慟哭した孔子さながらの恩師の恩情に、しばし暗涙に咽ぶと同時に、前記

孟子の名言が思い出され、この重症は天の降す試練である。

是が非でも回復生還して恩師の委嘱を果たさなければならぬ、「人生意気に感ず、功名誰か復た論ぜん」と固く決意した。天未だわれを喪ぼさず、幸いにも危機を脱し、翌年六月末に帰還することができた。

当時、大漢和辞典は第二巻刊行直前、大空襲を受けて、編集所は全焼し、その資料のすべてを烏有に帰した。

涙ながらに終戦の哀詔を拝聴した恩師は、辞典の編集を一時中絶したが、不撓不屈、再起を企て、その翌年から疎開して置いた全巻の校正刷りを整理修正せしめて刊行に着手した。

戦後におけるもろもろの艱難は、筆舌に絶するものがあつたが、昭和三十五年五月、全十三巻を刊行することができた。続いて縮写版、改訂版、語彙索引、補巻一卷を刊行し、昭和六十一年四月、恩師の委嘱を果たすことができた。

『大漢和辞典』は、空前の大事業で世界的に高く評価され、文化勲章の恩典に浴し、今日なお広く学会に活用されている。

かかる大事業に参画して微力を傾倒したことは、光栄感激にたえないが、思えば相中時代に受けた石川先生の薫化の賜で、その学恩に深謝してやまない。

### 三、御命名勸申の光栄

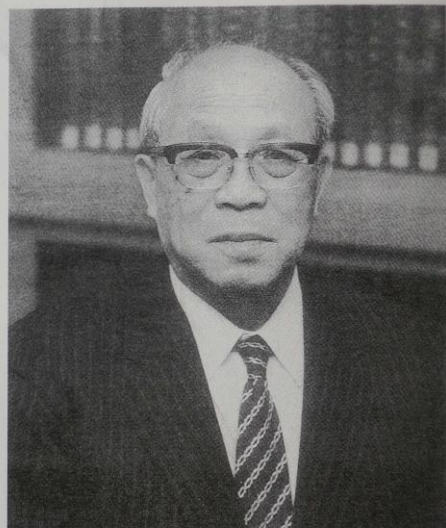
『孟子』の文に就いては、過分の光栄に浴したことがある。平成十三年十二月一日、皇孫内親王殿下のご降誕に際し、その年の七月に御命名勸申の大命を拝し、和漢の漢籍を博読し、その候補の一つとして、孟子・離婁編下の、

君子以仁存心、以礼存心。  
仁者愛人、有礼者敬人。  
愛人者、人恒愛之、敬人者、人恒敬之。

を典拠として、「敬宮愛子内親王殿下」のご称号ご名号を上申致しました所、図らずもご嘉納の光栄に浴し、恐懼感激の極みでした。

なお、上記の孟子の文は、恩師諸橋博士も揮毫されたことがあり、且つ皇太子殿下のご命名を勸申されており、師弟学縁の浅からざることに驚嘆感激している。

以上、蕪辞をつらねましたが、謹んで相高創立百周年の慶事を祝し、母校の学恩に謝すると共に、相高の限りなき発展と人材の輩出活躍を祈念し、筆を擱く。



▲ 1992年2月(81歳)東京成徳短大にて

鎌田正先生は、本年六月ご逝去なさいました。この原稿は本年二月に校正なされたもので、ご遺稿となりまして。先生には、八十年史、九十年記念誌、百年史と本誌、合計四回、ご寄稿を頂きました。深く感謝申し上げますとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

(編集委員会)

(※1)「紅の旗―創立百周年記念誌」 思い出の記より

二〇〇九(平成二十一年)一月発行

(※2) 旧姓 渡部 飯豊出身

(※3) 大正十一(一九二二)年―昭和五(一九三〇)年 相中教諭